# Rib Riv.

## CONCEPT

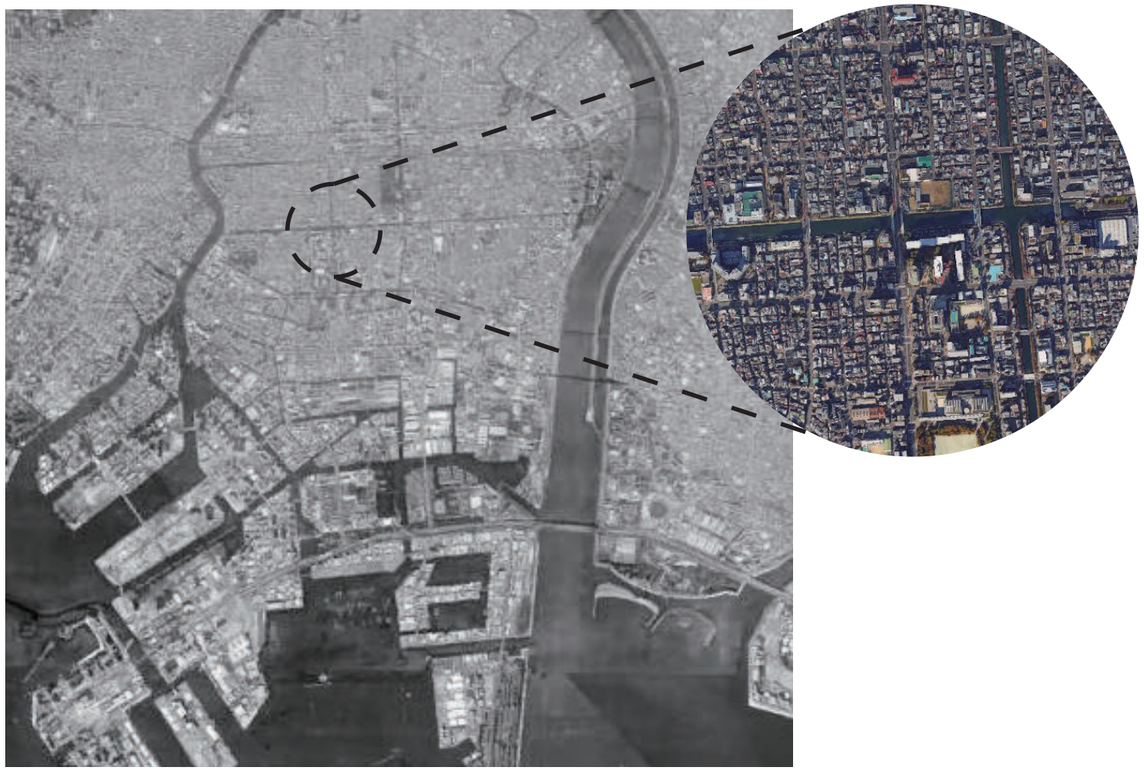
小名木川・大横川は、かつて水運によってこの地域の生活を支えてきた水路だが、その役目が薄れた今、まちから取り残されつつある。
そこで、まちにとって有用な川のあり方を土木構造物によって実現することで、川という空間がまちの中で活かされることを目指す。
まず、緊急時の物資・帰宅困難者のための輸送路として川を活用することを構想した。耐震補強された護岸に、川の流れを保護する構造物をつくることで、有事の際に活きる強いインフラとして川の存在価値を高める。
一方で、構造物に川の流れやまちの形状を反映させることで、空間に寄り添いながらまちに広がってゆく日常的な憩いの場、船による観光の場を創出し、都市における新たな景観を作り出す。

## PROGRAM

水面を覆う「あばら骨」のような構造体を耐震補強された護岸に設置
を倒壊する建物や樹木から守る。これは輸送の際の船への物理的なダ
木が船の通り道を妨げたり、川の流れをせき止めて氾濫を起こすなど
また、この構造物の上にデッキを設置することで、オープンスペース
ことができる。

# SITE　江東区 小名木川・大横川

この地域は江戸時代に水路が開削されて以来、水運を中心として発展してきた。木場や古石場という地名もそういったことに由来している。更に、明治時代には殖産興業の中心として工業が盛んであった。しかし、道路交通が主流となるにつれ、小名木川や大横川といった水路による交通・輸送の重要性は失われてきた。そして現在、この地域には河川が縦横に伸び、その役目といえば週末の観光船などに限られてしまった。今や、これらの河川は日常的な場ではなく、むしろ災害とったような負のイメージに結びつきやすくなってしまった。



# STATE

現在、川沿いの道は川辺の散歩道として整備はされているが、利用者は少ない。その理由としては、道が単調な直線であり歩くことをあまり楽しめないことや夜間の暗さ、そして建物の裏側に位置し利便性が低いことなどが挙げられる。
また、この地域には小規模な工場が多く存在しており、そういった場所では建物の倒壊危険度が比較的高い。

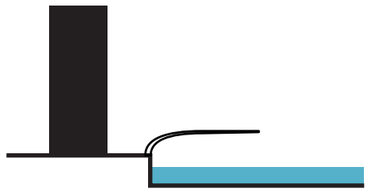
（現在の小名木川・大横川）

することで、緊急時の輸送路としての川の水面
メージを避けるだけでなく、倒壊した建物や樹
の二次的な被害を生むのを防ぐことができる。
として人々が往来したり、広場として活用する

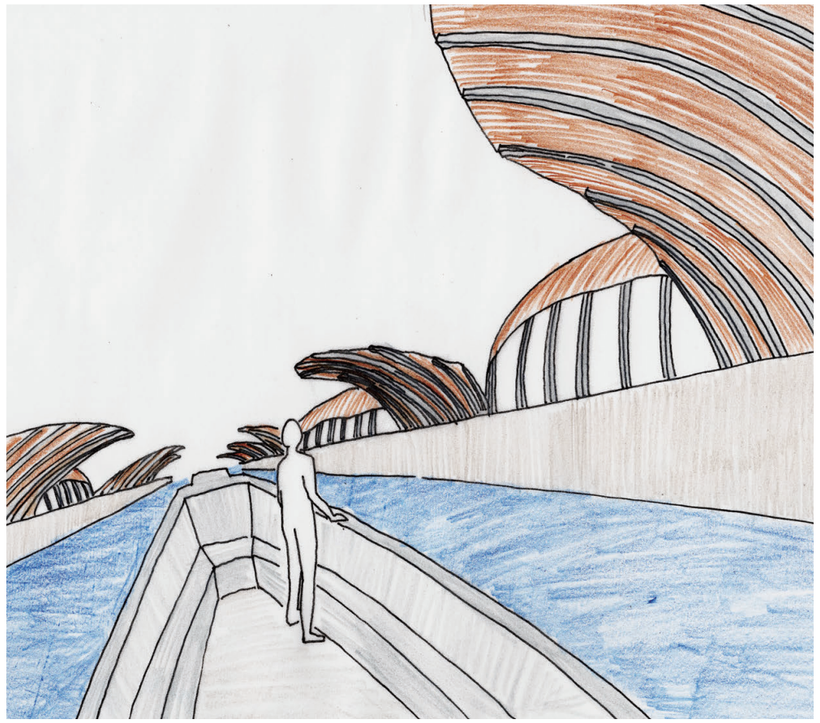
# DESIGN



脇道への入り口は構造を反転させることで、分かりにくい脇道の場所を示し、現在の単調さをなくし多様な空間を生み出した。また、隣接する公園と連続的に繋げることで、一つの大きなオープンスペー

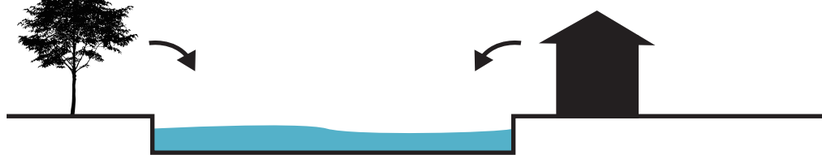


河川沿いの建物の高さに合わせて水面を覆う部材の長さを設定することで、最小限の部材で川を覆うことができ、まちの姿が水上の構造体にも反映されるようになっている。

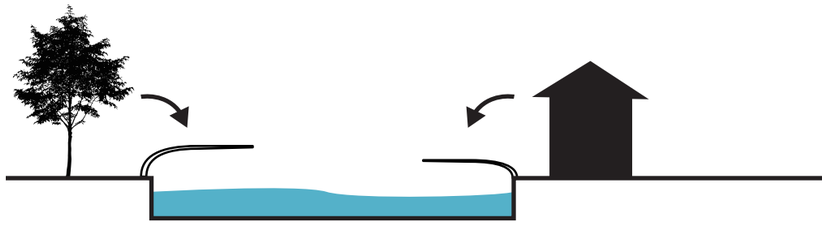


水路としての川を守る構造

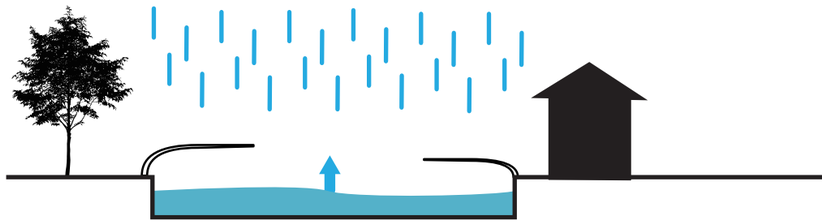
日常的な憩いの場



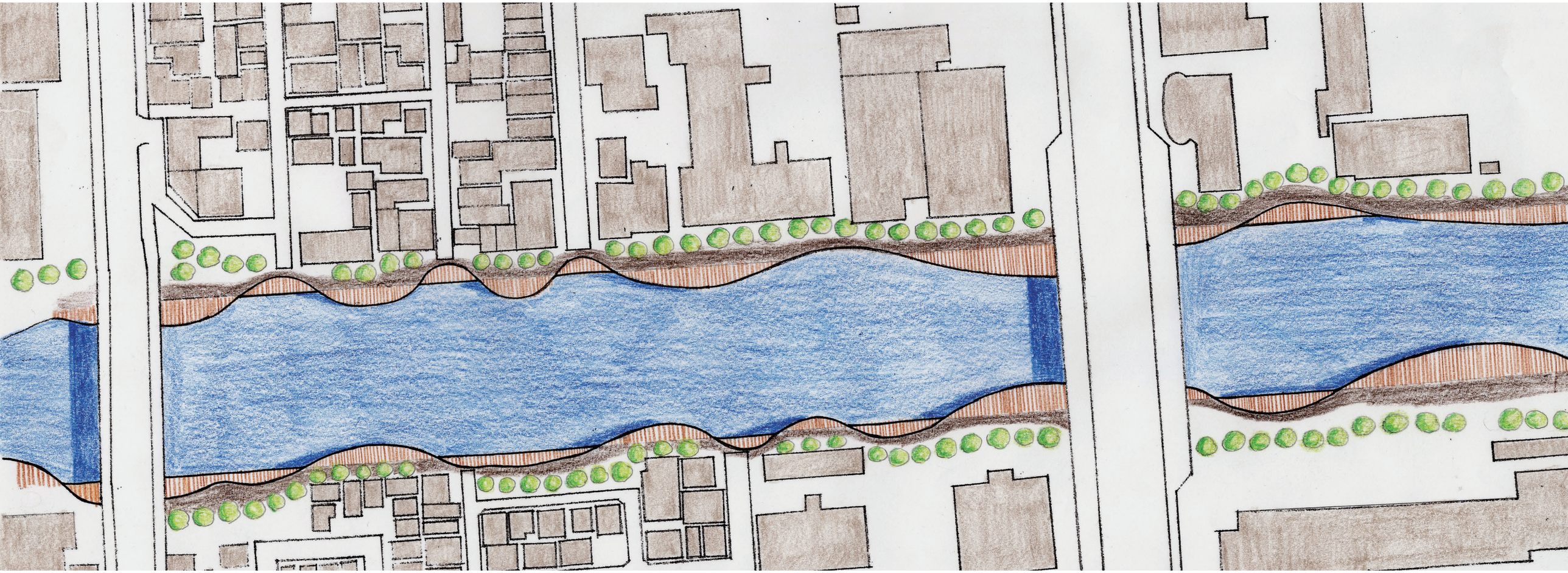
災害時に、樹木や倒壊した建物の一部が水をせき止め、氾濫を起こす危険が



あばら骨を設置することによって、樹木や倒壊した建物が河川をせき止める

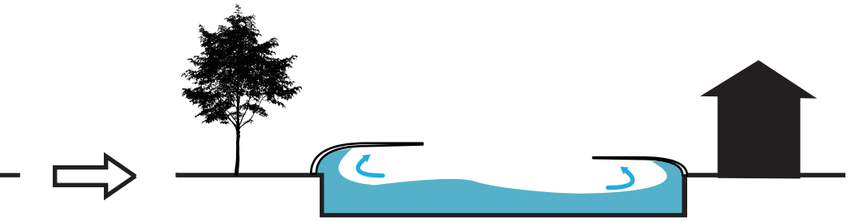


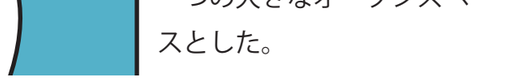
この構造は急な水位の上昇にも対応することができる。



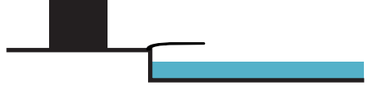
ある。

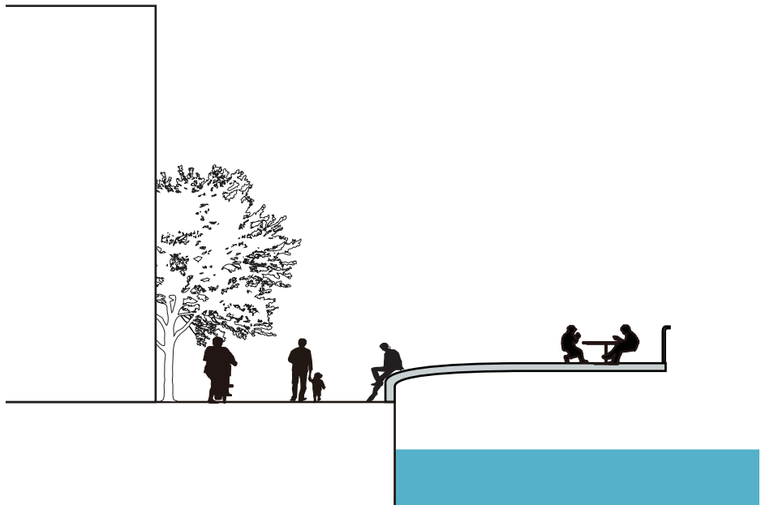
ことを防ぎ、緊急時の水路を確保する。



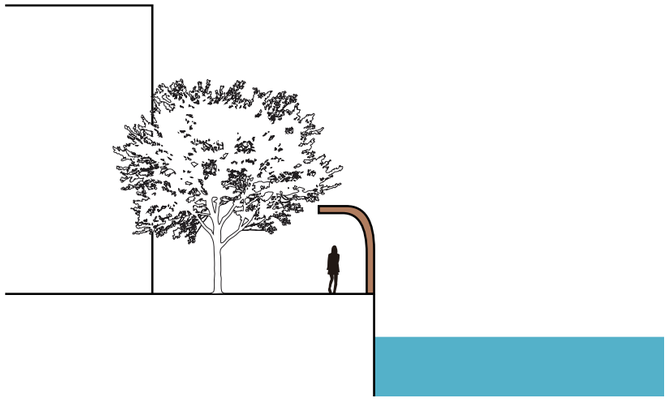
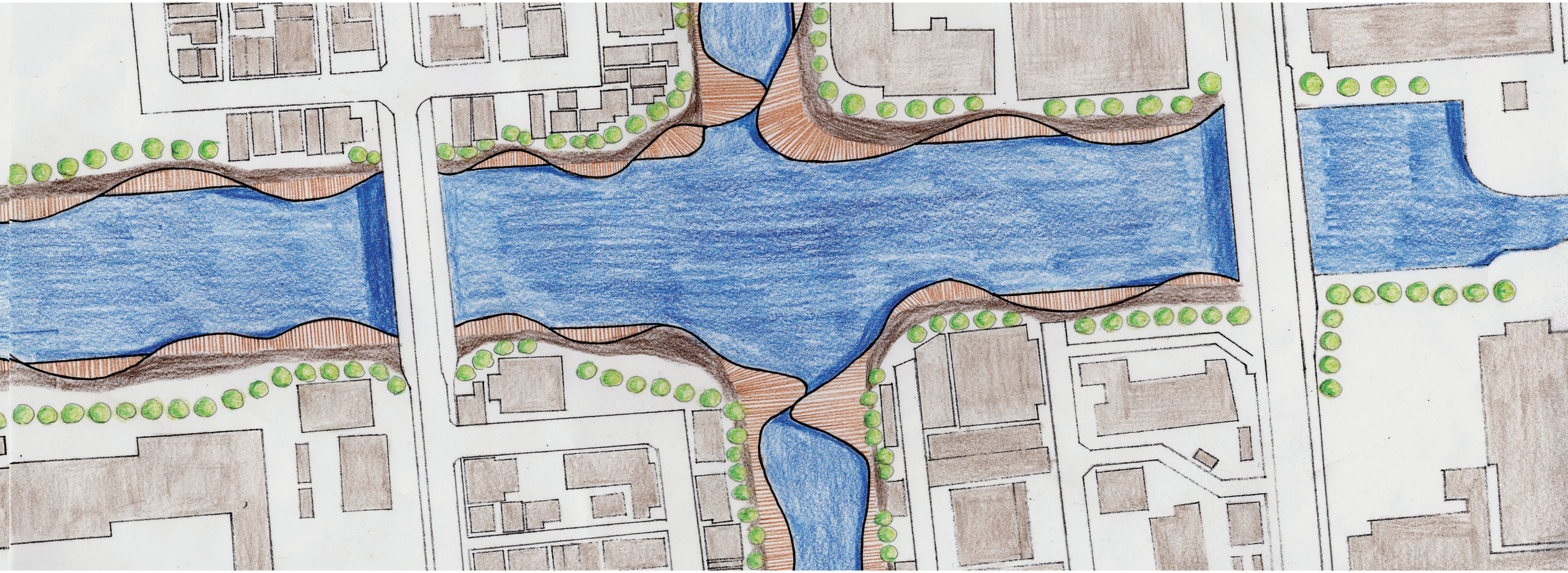


スとした。





あばら骨構造の上にスラブを張ることによって、その上を歩いたり、そこで座って休んだりすることができる。



反転した構造は道を覆い、川の上とは異なるアクティビティを生むと同時に、脇道を見つけるときの目印ともなる。